



田老町漁協、いわて生協、元村こどもさんさ愛好会から、総勢100人が参加。35年の産直取引を通じて培った信頼関係をさらに深め、力を合わせて復興に取り組むことを確認した。

「田老町漁協を励ます会」を開催

いわて生協

市街地のほとんどを津波で流された宮古市田老地区。

ここで活動する田老町漁協も、ほぼすべての漁業生産施設を失った。

しかし今、いわて生協と共に育ててきた、産直アイコープ「真崎わかめ」の復興に取り組んでいる。

**総勢100人が集結、
35年の歴史を確認**

10月22日（土）、いわて生協は、岩手県宮古市の田老町漁協で「田老町漁協を励ます会」を開催した。

宮古市田老地区は、高さ10m、幅2.4kmの大型堤防で知られる防災の街だ。だが、3月11日の震災ではそれを乗り越える津波が街に押し寄せ、約1、500世帯のうち、1、000戸を超える家屋が損壊し、死者・行方不明者は184人に及んだ。

田老町漁協でもわかめ加工場の工場長が亡くなったほか、組合員とその家族87人が犠牲となった。963隻あった漁船も、残ったのはわずか50隻足らず。7カ所あった漁港の堤防や岸壁が破壊されたことで、本部すぐそばのわかめの加工場をはじめ、魚市場や製氷工場、こんぶ、あわびの養殖施設など、多くの漁業生産施設を失った。

この日、生協本部近くの大型店「ペルフ牧野林」に集まった、岩手郡コープと盛岡中央コープの組合員は、朝8時に大型バスで出発。3時間かけて田老町漁協に到着すると、ここで宮古コープの組合員と合流。いわて生協理事長の飯塚明彦さん、専務理事の菊地靖さん、店舗の水産部門マネージャー、水産のバイヤーら役員も加



会場を和ませた、岩手郡コープ参加者による寸劇。田老町漁協の「真崎わかめ」のおいしさをユーモラスにアピール。

わつて、生協からは計49人の参加となった。さらに、この日は滝沢村で活動する「元村こどもさんさ愛好会」の子どもたちも加わり、田老町漁協からの参加者と合わせて、総勢100人を超えるイベントとなった。

施設のほとんどを流され、 ゼロからの出発

11時から始まった「田老町漁協を励ます会」では、まず、いわて生協の飯塚理事長が、「復興には大変な時間がかかりますが、緊張感を持って取り組んでいきます。田老町漁協といわて生協の歴史の中で培った信頼と協同の力を信じて、一層信頼関係を深めていきます」と、わかめの取引に始まる、両者の35年の歴史に触れながらあいさつ。田老町漁協組合長の小林昭榮さんは、

※ いわて生協では県内を16の地区に分け、それぞれを「〇〇コープ」と名付けている。岩手郡コープと盛岡中央コープはそれぞれ岩手県の西、内陸部で活動し、宮古コープは津波で被災した宮古市や沿岸部、周辺の市町村を活動エリアにしている。

生協との長い付き合いが 支えであり、誇りです

田老町漁協組合長 小林昭榮さん

震災では日本一の堤防を越えて津波が押し寄せ、多くの被害がもたらされました。田老町漁協でも組合員と職員、その家族に多くの犠牲者が出ました。

ずっと不通だった携帯がつながった時、さっそく連絡をいただいたのが生協の皆さんからでした。支援物資も届けていただき、本当にありがたかった。

初めの1カ月間は、海岸線ののれぎや海上の絡まった養殖施設の撤去作業に明け暮れました。その後、施設の復旧に取り組み、わかめの養殖については仮施設を設置して、夏には採苗を行なうことができました。この冬からは本養成となりますが、621台あった養殖施設はすべて失われたため、現在、439台の施設の復旧を急ピッチで進めています。例年2,000トンのわかめが採れますが、来春にはその8割に当たる1,600トン収穫するのが目標です。

生活も生産の基盤もすべてが失われてぼうぜん自失、「ここで漁業を再開できるのだろうか」、そう思ったこともあります。しかし、皆さんに支えられてやってきました。

いわて生協さんとは35年のお付き合いになりますが、それが、田老町漁協の組合員の誇りです。生協の皆さんの真心をいつも受け、それが今、希望となって前へ進む力になっています。

田老地区は過去にも津波やさまざまな災害に遭いましたが、先人の方々はそのたびに立ち上がってきました。今回も必ず復興を成し遂げたいと思っています。



いわて生協から軍手を贈られる小林組合長（左）。



田老町漁協・業務課長 鳥居高博さん

「すべてを奪われ、どこから始めていいのかぼうぜん自失でしたが、いわて生協さんの支援・激励があり、長い付き合いを思い出して頑張ってきました。7カ月が過ぎた今、漁業も地域の生活も立ち上がり始めています」と、感謝の言葉で応えた。

その後、田老町漁協・業務課業務課長の鳥居高博さんから、「ほとんどゼロからの出発でしたが、6月には天然わかめの出発でした。6月には天然わかめの出発でした。」

かめを収穫して、いわて生協で取り扱ってもらえることができました。8月には養殖わかめの種付けを終え、今はわかめの幼葉を成葉に育成する養殖施設の復旧に取り組んでいます」との報告があった。

いわて生協はこの日、トラックの寄贈を発表。また、盛岡中央コープと岩手郡コープからも募金と軍手が贈られた。日本生協連からは「CO・OP貼るカイロ」が寄贈され、一層の支援の姿勢を明確にした。

海中の残骸にシヨック、だが、復興は始まっている

会場を和ませたのが、岩手郡コープの参加者による寸劇だ。4人が舞台に

立ち、田老町漁協の「真崎わかめ」がいかにおいしく、健康に良いかをユーモラスにアピールした。午後からは、滝沢村の「元村こどもさんさ愛好会」の子どもたちが、舞台狭しと、太鼓を打ち鳴らし、笛の音を響かせてさんさ踊りを披露。会場中に熱い声援を送った。

午後2時少し前に「励ます会」は終了。その後、生協の参加者は沿岸の漁協施設跡へ向かった。

堤防を抜けて海沿いに見えたのが、かつてのわかめ加工場だが、今は跡形もなく土台だけが取り残されている。海中から突き出た残骸にシヨックを受ける参加者に対し、案内に立った鳥居課長は、「あまりにもひどい被害で、漁



さんさ踊りを披露する「元村こどもさんさ愛好会」の子どもたち。

業をやめてしまおうかという組合員もいました。しかし、今は施設の再建が進んでいます。それを目にすれば、必ずもう一度、やる気を出してくれるはず」と、養殖施設ばかりでなく、加工場の再建も進んでいることを説明。復興は人の強い意志にかかっていると訴えた。

「励ます会」開催を呼びかけた岩手郡コープ理事の反町久美さん（写真上中央）は、「街が無くなり、景色もすっかり変わってしまいました。内陸では、日常が戻っているのに、こちらはまだまだこれから。応援し続けなければとあらためて思いました」と、これから引き続き支援していく決意を固めていた。

（文・写真 山本明文）